

八 卷 和 彦 著『クザーヌスの世界像』

創文社, 2001年, vii+333+137頁

川 添 信 介

著者八巻氏は長年にわたって国内外のクザーヌス研究の一線にたってこられたが、本書はこれまでの研究の集大成として、全体があらたに書き下ろされた著作である。ここには一貫した視点と解釈の筋道が、十分に練り上げられた構成をもって提示されている。まずは本書の目次を掲げておきたい。

- 序 章 本研究の目的と方法
- 第1章 クザーヌスにおける〈哲学〉
- 第2章 〈多様性〉問題
- 第3章 方法としての〈反対対立の合致〉
- 第4章 楢円の思考
- 第5章 〈神の現れ〉の諸相
- 第6章 〈協和〉としての世界
- 終 章 〈多様性〉から〈協和〉へ

本文の序章では明示されていないが、巻末に付された *Zusammenfassung* では全体が二つの部分、すなわち、クザーヌスの「思考」の基本構造と本質的特質とが提示される前半の1, 2, 3, 4章からなる第1部と、本書の表題たる「世界像」が正面から記述される第5, 6章からなる第2部とに区分されている。だが、この章立ては、序論的で或る意味では結論の先行提示でもある第1章を別にすると、終章のタイトルにあるように、大枠では、世界の〈多様性〉という問題に突き動かされて思考を始め(第2章)、晩年におよんで世界の種々の層における〈協和〉の認知・確信へと至る(第6章)というクザーヌスの思考過程が記述されていると見ることもできるし、終章では著者自身がそのように読むことの可能性を示唆している。クザーヌスの場合、思考の基本構造とそこから得られる世界像とを切り離すことがとりわけ困難であるこ

とを考えると、本書の構成の二つの読みは決して二義的で曖昧だということにはならない。

さて、私はクザーヌス研究を専門とするものではないので、著者の解釈の詳細に立ち入ることはできない。だが、専門家ではない私が本書から得た最大の贈り物は何であっただろうか。それは何ととっても、クザーヌスの思考を、それが行われていた現場で、思考者のいわば内側から感得できたと思えたことである。〈包含—展開〉、〈似像—原像〉、〈反対対立の一致〉、〈推測〉、〈non aliud〉、そして〈覚知的無知〉といった彼を特徴づけるとされるさまざまなことばは、それを出来上がってしまったところからではなく、そのように思考をはこぼざるを得なかった思考者の関心に寄り添うとき、初めて納得のゆくものとなる。世界はなぜこれほどの多様と対立とを含みこんでいるのかという〈多様性〉問題は、ギリシア以来の古典的問題であるとはいえ、一なる神による創造への信仰を受け入れるクザーヌスにとっては、より重い課題となっていた。本書はその課題がどのようにして問われどのように答えられたのかを、初期から中期、さらに晩年の諸著作を丹念に解説することによって解明している（校訂途中でハイデルベルク全集版では未公開の種々の説教までもが丁寧に探索されていることは特記しておきたい）。その論述はあたかもクザーヌス自身の思考過程を、その裏にたちいてそのまま再現したかの感を与えるものとなっている。本書のもつこの特徴は、どのような古典解説に対しても望まれる美質であろうが、とりわけ「神秘主義」的と評されることのあるクザーヌスの作品にとっては、欠くことのできないものであると思う。ことばと論理を超えた何かを直知し、その対象の本質からして語り得ないことを承知しながらもそれを語り出そうとするクザーヌス、そのクザーヌスの思考について一書を著そうとするとき、「どうしてそのように語らざるを得なかったのか」という視点は不可欠であるように思われる。この言うは易く行うは極めて困難な仕事を、著者は見事に成し遂げているのである。

とはいえ、このようにクザーヌスの思考現場を徹底して再現しながらも、著者が自分自身のことばを持っていないということでは決してない。著者はある意味では大胆で魅力的なことばを用いて、このコースの枢機卿の思考の本質を提示しようとしている。例えば、八巻氏は哲学（Amor sapientiae）を「励起と修練の哲学（philosophia excitationis exercitationisque）」と名付ける。「把握できないものを把握できない仕方
で抱握」しようとするクザーヌスにとって、「知恵の狩」である哲学は、一方でど

こまでも途上のものであり「自らを開いた」ものであり目的そのものではなく修練なのである。そして他方では、狩へと駆り立てている何かによって励起されたものが、クザーヌスにとっての哲学なのだという解釈を簡潔に表現したものである。また、第4章はクザーヌスの思考の根本的特徴が「楕円の思考」として整理されている。無知を自覚し自己の思考を「推測」に過ぎず、他の被造物に対して人類を特権化せず、また自己の所属する社会集団の惰性を排しようとする「脱中心の思考」は、自己の視点と対立する別の中心を要請・前提することになり、二つの極を持つ「楕円の思考」を成立させる。しかも、その思考の二つの極は固定したものではなく、ダイナミックな展開を含みこむものであると見なされている。以上のような著者の提示することはば、確かに厳密にはクザーヌス自身のものではないにしても、彼の思想の本質を剔りだしているものであると思われる。

上記したように、本書がクザーヌスの思考の特徴と世界像とを極めて明晰で説得的に語るものであることは疑いえないが、それではそこから私たちは何を学ぶことができるのであろうか。八巻氏はこの点について禁欲的であって、軽々に多くを語っておられない。しかし、少し長くなるが本書の掉尾をかざる著者の言葉を引用し、そこから評者の感想めいたものを記しておきたい。

「ニコラウス・クザーヌスは、その青年時代における〈多様性〉問題への覚醒から、これの克服のために長年にわたり〈協和〉についての思惟を重ねる中で、〈amor sapientiae〉(知恵の愛)としての哲学についての思索を深めると共に、〈medium〉(媒介・手段)として〈反対対立の合致〉を用いることを重要な足がかりにしつつ、壮年に至って世界が〈協和〉に向かっていることを実感できる思想的地平に到達した。そして彼は、この到達点を基盤として、過酷な〈多様性〉の抗争の中にあっても、その晩年に至るまでためむことなく〈協和〉としての世界像を説き続け、同時に求め続けることができたのである——その向こうに真の一致たる真理を展望しつつ、その到来でありそれへの到達である事態の成立を待ち望みながら。」(p.327)

「世界は〈協和〉に向かっている」ことを、現代の私たちは容易に承認することができるであろうか。むしろ世界は雑然たる〈多様性〉、ただそれだけであり、調和し

がたい深刻な〈反対対立〉を望まれるべき協和のための媒介・手段とするような地平を持ち合わせていないように思われる。そして、このような観察はまさに若きクザールヌス自身のものであり、そのことの自覚から彼は思索を始めたのであったかもしれない。しかし、壮年にいたって彼はこのような世界像を「克服」し、〈協和〉としての世界を「実感できる思想的地平」に至ったのであるが、それはいったいどのようにして可能となったのだろうか。このクザールヌスの生涯における決定的な転換点が「なぜ、いかにして」起こったのかについては、語られていない。というより、これはおそらくは語り得ないことであるだろう。しかし、上述の通り、本書が決定的転換点以降のクザールヌスの思考過程を丹念に提示すればするほど、何か空洞のようなものが際立ってくるのである。

評者のこのいわば「ないものねだり」と同様のことを、著者も自覚しておられるのかもしれない。というのは、本書の主題がクザールヌスの「世界観」ではなく「世界像」とされるのは、「キリスト教的世界観」に基づいているにしても、「彼が描きあげた現実の世界の姿」を「客観的所産」として取り出すことが可能であるからであると述べられているからである。世界内の反対対立を究極的に〈媒介〉したイエス・キリストへの「信仰そのもののあり方に由来する」クザールヌスの「世界像」(pp.6-7)が、思想の歴史において成立した一つの世界像であるという意味で「客観的所産」であるのはその通りである。しかし、その所産がわれわれにとって共有され得るものであり、普遍化可能性を持つと評価されるものであるという意味で客観的であるかどうかの判断は、やはり世界像がそこから由来する世界観にまで踏み込まざるを得ないと考えられる。もちろん本書でも、キリスト教信仰に固有な諸主題が論じられており、それを扱う著者の立場設定も明記されている。すなわち、クザールヌス自身がイエス・キリストについて仮定論証を用いていることにならって、クザールヌス理解においても同じような仮定論証として彼の世界像を記述するのだと語られている (p.14)。確かに、世界像を信仰を含む世界観から切り離し、そのことによって哲学史的客観的記述が可能になるであろう。しかしやはり、クザールヌスの世界像の源泉であるキリスト教的世界観をまるごと考察の対象とすることはできるのではないのか。クザールヌスの信仰を解釈者が共有しないとしても、単なる仮定ではない信仰(あるいは信念)を含んでいる世界観の中で、現代のわれわれにとって有意義な要素は何なのかと問うことは可能であろう、という感想を持たざるを得ないのである。

クザーヌスの思想が、一方で極めて形而上学的で思弁の様相を持つと同時に、他方で具体的で生々しい時代状況とそこでの彼自身の生と密接な連関を持っていた。というより、この二つのことは一つのこととして考えられていた。著者はこのことをはっきりと意識し、論述の至るところに通奏低音のように、思想と生とが重なりあったクザーヌスの姿を読み取り学ぼうとする著者の姿勢が響いてくる。私は、この哲学史研究者としての八巻氏の姿に、本書の簡明でありながら透徹した文体とあいまって、感銘を覚えたことを告白する。そして、その感銘が深いだけ、次には哲学者としての八巻氏の姿を見たいという願望をも抱いたのである。